

## 女子大学生におけるスポーツ参加の検討（Ⅱ）

高見和至・山川岩之助  
(教育学部社会教育学科)

### An Investigation of Sport Participation in Women's University Students Part II

Kazushi TAKAMI, and Iwanosuke YAMAKAWA

#### 1. 緒言

本研究は「女子大学生におけるスポーツ参加の検討（Ⅰ）」<sup>12)</sup>の第2報である。近年の幅広い年齢層におけるスポーツ活動の増加を反映して、スポーツ参加に関する研究が数多くなされている<sup>1)5)8)10)12)13)15)</sup>。それらの研究からは対象別にスポーツ参加を規定する要因が明らかにされている。前報ではそれらの要因の中で「成人期以後のスポーツ参加には就学期間のスポーツ経験の有無が大きく影響する」<sup>2)9)10)</sup>という点に着目し、現大学生が将来、生涯スポーツとして各個人の欲求に応じてスポーツを生活に導入していくためには大学就学時にスポーツ参加経験を持つことが重要な要因となると考え女子大学生のスポーツ参加の現状について検討した。

そこで女子大学生を対象にまずスポーツの実施頻度、運動系サークルへの加入状況等のスポーツ参加の現状を調査した。また先行研究をふまえてスポーツ参加に影響すると考えられる過去の運動経験などのスポーツに関連した要因、通学時間、授業時間などの生活環境に関連した要因を調査し、スポーツ参加を規定する要因の現象記述を行った。またスポーツ参加の検討には生活環境などのスポーツ参加の物理的要因だけではなく、スポーツを行う個人の主体的、心理的な要因についても検討する必要があることから、スポーツ参加の動機の構造およびスポーツ種目の選択から実践に至る準拠枠になるスポーツ参加の志向性について因子分析を用いて検討した。

これらの調査を総括すると女子大学生におけるスポーツ参加の一般的傾向として「仲間作りを動機としたスポーツ活動欲求を持ちスポーツのファッション性に関心があるが、実際に行う

には通学時間等の時間的条件や金銭的な負担が阻害要因になっている」<sup>12)</sup>という結果が考察された。

本稿では前回の調査をもとにスポーツ参加を規定している各要因について個々に検討する。またスポーツ参加の動機と志向性の関連、つまり「どのような動機」と「どんなスポーツ種目群（志向性）」が関連しているのか明らかにし女子大学生のスポーツ参加に対する意識、態度について検討する。

## 2. 方 法

調査対象：千葉県内のK女子大学に在籍している1年生 330名。

(前報と同じ)

調査方法：質問紙法によるアンケート調査

調査内容：(前報と同じ：概要)

1. フェースシート スポーツ参加を規定する生活環境要因を検討するため以下の要因を調査した。
  - ・年齢 ・住所 ・居住形態 (自宅・アパート)
  - ・通学時間 ・交通期間 ・アルバイト
  - ・おこずかい (一ヶ月に自由に使える金額)
  - ・勉強時間 (授業時間は除く)
  - ・授業時間数 (一週間のコマ数)
2. スポーツ参加の状態を把握するため以下の項目を調査した。
  - ・過去の運動歴 (小学校から高校までの部活動などの運動歴)
  - ・現在の部 ・サークル加入状況
  - ・スポーツサークル活動の5つの条件の充足度 (1. 場所 2. 練習時間 3. 指導者 4. 仲間 5. 施設・用具の充実)
  - ・スポーツ大会/イベントへの参加
  - ・スポーツの実施頻度
  - ・スポーツの実施時間 (一週間の平均運動時間, 授業は除く)
  - ・スポーツ観戦の有無
  - ・スポーツ活動の阻害要因 (14項目)
  - ・家族のスポーツ経験者の有無

## 女子大学生におけるスポーツ参加の検討（Ⅱ）

- ・スポーツ新聞・雑誌の購読頻度
- ・テレビ等のスポーツ番組の視聴頻度，番組内容
- ・現在のスポーツ活動に対する欲求の程度

### 3. スポーツ参加の動機調査

丹羽・松村<sup>10)</sup>が女子大学生のスポーツ参加動機を検討するために作成した質問項目を一部修正し6段階評定で用いた。

### 4. スポーツ参加の志向性調査

調査対象が現在どんなスポーツ種目に関心を持ち，また実際に行っているかについて，43のスポーツ種目について「1. 関心がない～6. 上級レベル（高い技能で楽しむ）」の6段階で評定させた。

#### 分析方法：

#### 1. スポーツ参加規定要因のクロス集計

前報の結果とくに影響していると考えられる要因についてスポーツ参加の状況（図1：スポーツサークルへの加入状況）とクロス集計し，個々の要因について考察する。

今回取り上げた要因はa. スポーツ活動欲求（図2），b. 通学時間（図3），c. アルバイト（図4），d. 高校時代の運動経験（図5）e. 家族のスポーツ経験の5つで，その選出には阻害要因の調査結果および先行研究を参考にした。

#### 2. スポーツ参加の動機と志向性の関連

スポーツ参加の動機と志向性調査について因子分析の結果得られた，スポーツ参加動機7因子，志向性8因子の相関を求める。各因子の得点については各因子に該当する項目の合計点を用いた。

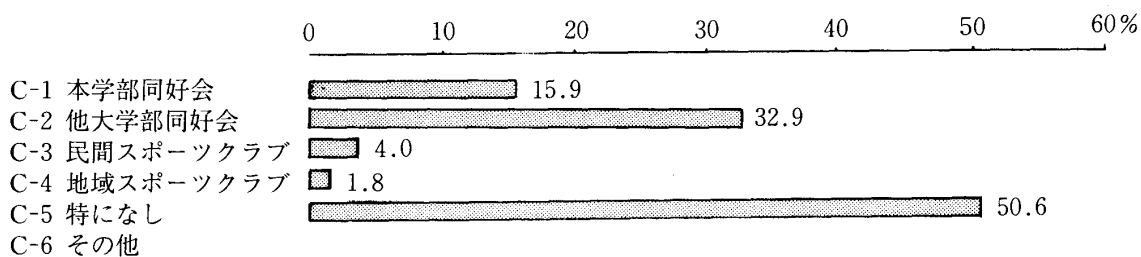


図1. スポーツサークルへの加入状況（N=328）

### 3. 結果及び考察

#### スポーツ参加を規定する要因のクロス集計

##### ①スポーツ活動の欲求程度(図2)とサークル加入・実施頻度

表1はスポーツ活動の欲求程度とサークル加入のクロス集計で5%水準で有意差が認められた。当然ながら活動欲求が高いほどサークル加入の割合が高くなっている。また表2の実施頻度にも同様の傾向が認められスポーツ参加を促すものが本人の欲求であることが確認される。

表1の「強く思う」の分布で在籍大学のサークル加入率よりも他大学のサークル加入率が高くなっているが、これは在籍大学のサークルの種類及び活動内容が不十分であることを示唆し

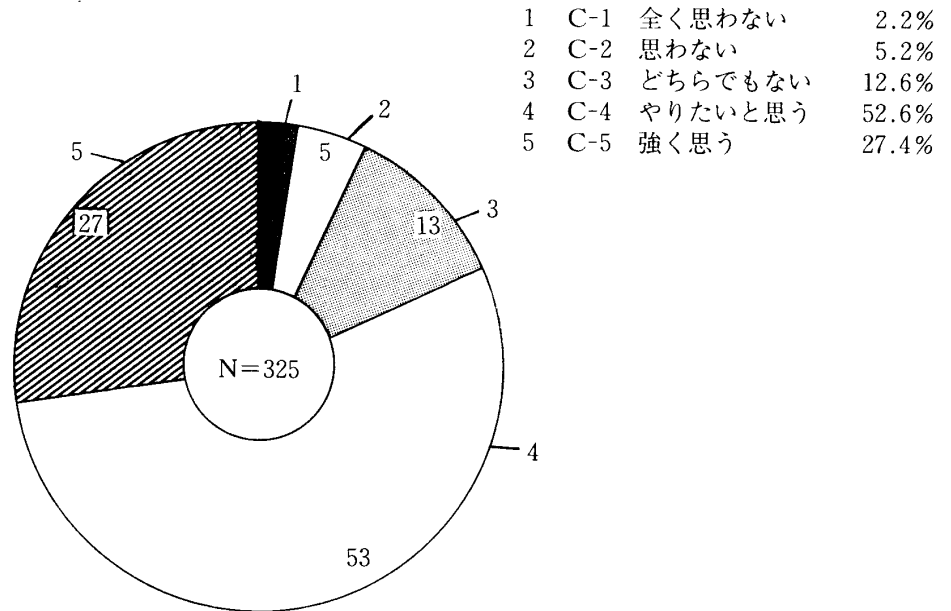


図2. スポーツ活動の欲求程度

表1. スポーツ参加の欲求程度と所属運動スポーツサークル (%)

所属	在籍大学	他大学	民間	地域	未所属
(欲求程度)					
強く思う	28(31.8)	34(38.6)	5(5.7)	3(3.4)	29(33.0)
思う	23(13.5)	63(36.8)	6(3.5)	2(1.2)	83(48.5)
中間	1(2.4)	9(22.0)	1(2.4)	1(2.4)	29(70.7)
思わない	0	2(11.8)	1(5.9)	0	14(82.4)
全く	0	0	0	0	7(100.0)

$\chi^2=26.81$   $p<0.05$

女子大学生におけるスポーツ参加の検討（Ⅱ）

表2. スポーツ参加の欲求程度と実施頻度のクロス集計（%）

頻度	無し	月1・2	週・1	週2・3	ほぼ毎日	計
(欲求程度)						
強く思う	16(18.2)	11(12.5)	17(19.3)	39(44.3)	5(5.7)	89
思う	66(39.3)	28(16.7)	36(21.4)	32(19.0)	6(3.6)	171
中間	29(70.7)	8(19.5)	3(7.3)	1(2.4)	0	41
思わない	15(88.2)	0	0	2(11.8)	0	17
全く	7(100.0)	0	0	0	0	7

$\chi^2=27.45$   $p<0.05$

ていると思われる。またスポーツ参加の動機の中で種々の対人関係の構築を示す親和因子が優勢であったことが理由であろう。

②通学時間（図3）とサークル加入

表3は通学時間別に見たサークル加入の状況である。この結果有意差は認められず、通学時間がサークル加入に影響を与えているとは考えにくい（実施頻度も有意差無し）。その理由としてサークルの練習が週に1・2回のサークルが多いこと、また練習への出席が必ずしもぎむづけられていないことから通学時間の長さがそれほど負担になっていないのであろう。また他大学のサークルに加入する際、通いやすい大学を選んでいるのではないかと思われる。

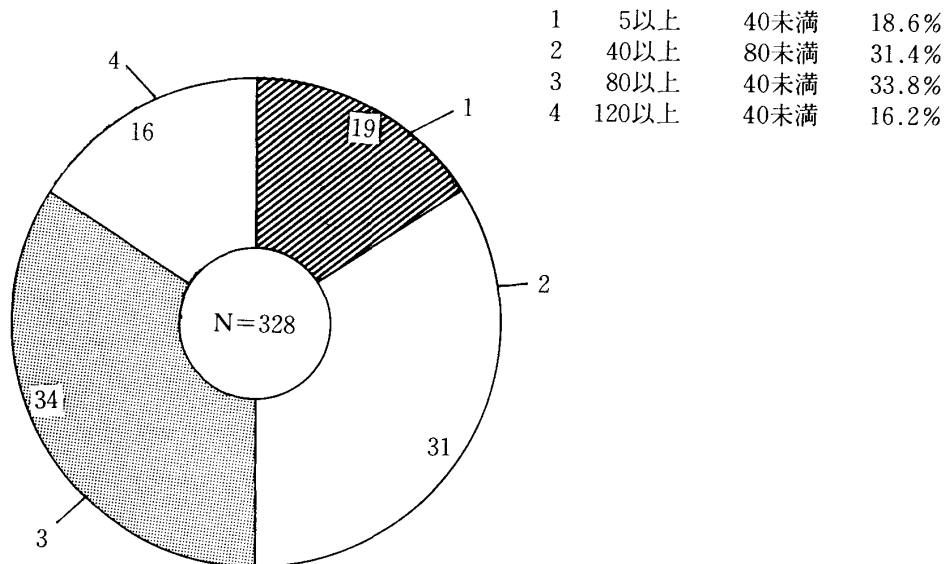


図3. 通学時間（片道，分）

表3. 所属スポーツサークルと通学時間(分)のクロス集計(%)

所属	在籍大学	他大学	民間	地域	未所属
(以上-未満)					
5-40	11(18.3)	16(26.7)	1(1.7)	2(3.3)	32(53.3)
40-80	17(16.5)	30(29.1)	5(4.9)	1(1.0)	55(53.4)
80-120	14(12.7)	46(41.8)	3(2.7)	3(2.7)	50(45.5)
120-165	10(18.9)	16(30.2)	4(7.5)	0	27(50.9)

\*有意差なし

③アルバイト実施状況(図4)とサークル加入

アルバイトの実施状況は約6割の者が週に2~3日行っていた。サークル加入状況とのクロス集計では有意差は認められない(表4)。さらに実施頻度でも有意差はなく、アルバイ

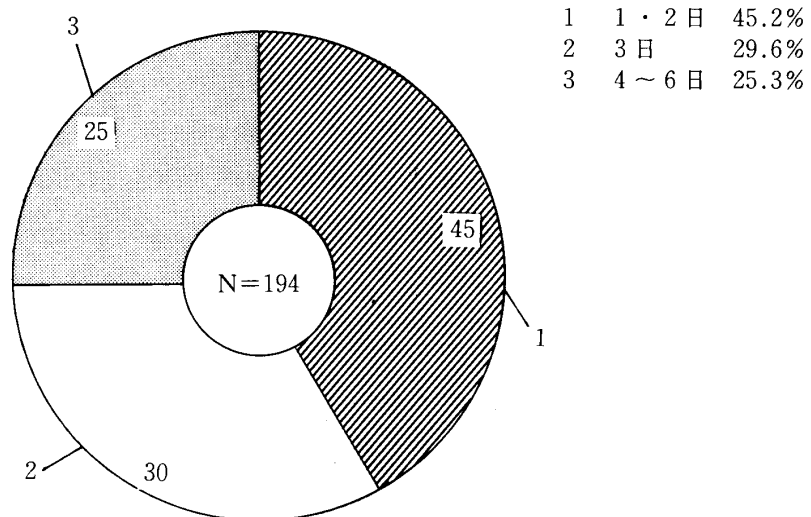


図4. アルバイト実施状況(～日/週)

表4. 所属スポーツサークルとアルバイト(日/週)のクロス集計(%)

所属	在籍大学	他大学	民間	地域	未所属
(～日/週)					
0	23(16.1)	38(26.6)	4(2.8)	3(2.1)	79(55.2)
1・2	16(19.3)	23(27.7)	3(3.6)	1(1.2)	46(55.4)
3	8(14.5)	22(40.7)	4(7.3)	1(1.8)	24(43.8)
4~6	5(10.6)	25(53.2)	2(4.3)	1(2.1)	17(36.2)

\*有意差なし

女子大学生におけるスポーツ参加の検討（Ⅱ）

トの実施がサークル加入に直接影響を与えるわけではないようである。理由としては上述の通学時間と同様、サークルの練習内容、他大学サークル選択が影響していると考えられる。表4で特記すべきことはアルバイトを行っていない者で半数以上（55.2%）がサークル未加入であることである。これは前回スポーツ参加の阻害要因の調査で「お金がかかる」ことが時間的な条件の次にあげられていたことに関連しており、サークル活動に必要な費用をアルバイトで補っていることも考えられるだろう。

④高校時代の運動経験（図5）とサークル加入

表5は高校在学中の運動経験とサークル加入のクロス集計で5%水準での有意差は認められない。しかしながら高校在学中に部活動経験を持つ者がサークル活動により多く参加している傾向がみられる。これは先行研究<sup>3)10)11)</sup>と一致した結果で高校時代の部活動経験など過去の運動経験がサークル活動加入の誘因になるようである。

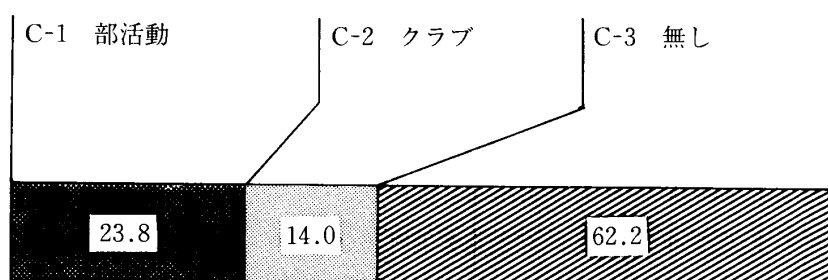


図5. 高校での運動歴 (N=328)

表5. 高校時代の運動経験と所属スポーツサークルのクロス集計 (%)

所属	在籍大学	他大学	民間	地域	未所属
(運動経験)					
部活動	19(24.7)	32(41.6)	7(9.1)	1(1.3)	29(37.7)
クラブ	5(10.9)	20(43.5)	2(4.3)	1(2.2)	19(41.3)
無し	28(13.7)	56(27.5)	4(2.0)	4(2.0)	117(57.4)

$\chi^2=14.32$   $p<0.10$

⑤家族のスポーツ経験とサークル加入

家族のスポーツ経験者の有無では77.2%の者が「いる」と答えた（いない：22.8%）。クロス集計では5%水準の有意差は認められないが、在籍大学のサークル加入で差がみられる。スポーツ参加動機の分析では「家族にスポーツをしている人がいる」、「家族が進めるから」等の

項目を含む勧誘因子が抽出されており家族のスポーツ経験がスポーツ参加の誘因になっていることが推察される。

表6. 家族のスポーツ経験と所属スポーツサークルのクロス集計 (%)

所属	在籍大学	他大学	民間	地域	未所属
(家族の経験者)					
いる	49(19.6)	83(33.2)	11(4.4)	4(1.6)	119(47.6)
いない	3(4.1)	25(33.8)	2(2.7)	2(2.7)	43(58.1)

$\chi^2=7.83$      $p<0.10$

#### スポーツ参加動機と志向性の関連

前回の分析でスポーツ参加の動機と志向性の構造を因子分析を用いて検討している。その結果、動機7因子、志向性については8因子が解釈された。以下に各因子の解釈内容、該当項目の一部を述べる。

##### ①スポーツ参加動機

1) 親和因子：種々の人間関係の構築を示す。

「いろいろなひとと接することができる」

「友達ができるから」

2) 社会的望ましき因子：社会的な外見や他者の評価を含んでいる。

「人に自慢できるから」

「就職の際有利だから」

3) 人格形成因子：人格の養成に関する項目

「忍耐力を養成できるから」

「協調心を養えるから」

4) レクリエーション指向因子：スポーツ自体を楽しむことを目的とした内容

「楽しいから」

「スポーツをした後、気持ちがいいから」

5) 健康・美容因子：健康や痩身に関する内容

「身体がスマートになるから」

「健康のために良いから」

6) 勧誘因子：周囲の人からの勧誘が動機になっている



女子大学生におけるスポーツ参加の検討（Ⅱ）

「友達が勧めるから」

「家族が勧めるから」

7) 挑戦達成因子：自分への挑戦や試合への傾倒を示す

「試合での緊張感が好きだから」

「自分がどれだけできるかためせるから」

②スポーツ参加の志向性

1) ファッション志向因子：マスコミに取り上げられファッション性が高い

(ゴルフ, ラクロス, スカッシュ)

2) 武道志向因子：武道に該当する種目

(柔道, 空手, 剣道)

3) 遊戯スポーツ志向因子：身近に施設があり遊戯的要素が高い

(ボーリング, 卓球, アイススケート)

4) 身体トレーニング志向因子：民間スポーツクラブで実施されている

(エアロビクス, フィットネストレーニング, 気孔/ヨガ)

5) 健康志向因子：一般に健康の維持増進に用いられている

(ウォーキング, ジョギング, スイミング)

6) アウトドア志向因子：所謂, アウトドアスポーツ

(登山/ハイキング, オリエンテーリング, キャンプ)

7) シューティング志向因子：(ライフル射撃, アーチェリー)

8) 標準的球技志向因子：一般的な団体球技種目

(バスケット, バレー, サッカー)

表7はスポーツ参加動機と志向性の相関係数の一覧表である。動機と志向性の関連をみるこ

表7. スポーツ参加動機と志向性の相関係数 (n: 325)

(志向性)	ファッション	武道	遊戯	身体トレ	健康	アウトドア	Shooting	標準的球技
(動機)								
親和	.56*	.33	.62**	.36	.34	.48*	.31	.66**
社会的望ましさ	.75**	.40*	.35	.55*	.38	.29	.29	.45*
人格形成	.31	.62*	.24	.31	.59*	.34	.30	.39
Recreation	.52*	.31	.71**	.65**	.33	.59*	.32	.63*
健康・美容	.35	.37	.42*	.61*	.71**	.32	.25	.36
勧誘	.48*	.37	.41*	.33	.23	.44*	.26	.67*
挑戦・達成	.42*	.21	.22	.29	.37	.25	.27	.64*

(\* : p<0.05    \*\* : p<0.01)

とで、「どのような動機からどんなスポーツ種目が選択、実施されているのか」が明らかにでき、女子大学生のスポーツ参加に対する意識、態度について考察できる。

親和動機は対人関係の構築を求める動機であるが、ファッション性志向、遊戯スポーツ志向、アウトドア志向、標準的球技志向と比較的高い相関が認められる。これらのスポーツ種目群は友達作りや種々の人間関係を持つことができる種目と認知されているようである。

社会的望ましき因子ではファッション性志向、身体トレーニング志向と高い相関がみられる。これは流行のスポーツをやっていることやスポーツクラブに通っていることが女子大学生のなかで周囲から好ましいとされると思われる。また武道志向、標準的球技志向とも中程度の相関が見られこれらのスポーツ種目を行うことは周囲へのアピール性を有するようである。

人格形成因子は武道志向及び健康スポーツ志向と相関があり、武道やジョギング、水泳という種目は自分を変えるという自己の内面形成の手段として捕えられる傾向があるようだ。

レクリエーション志向因子は遊戯スポーツ志向、身体トレーニング志向など5つの志向性因子と相関が認められ、女子大学生がスポーツ全般に対して「楽しみ」や「気晴らし」の手段と考えている傾向を示唆するものであろう。

健康・美容因子はやはり身体トレーニング志向、健康スポーツ志向と相関が高い。これは動機と種目の直接的な関連を示すものであるが、一方でステレオタイプ的な捉え方であり健康・美容が目的ならば種目選択も大切だがその実施方法が問題であるという認識が不足しているようにも考えられる。

勧誘因子は標準的球技志向、ファッション性志向、アウトドア志向と相関が認められる。これは標準的球技志向の種目は団体種目でありチーム作りが必要であること、ファッション性志向の種目はゴルフ、ラクロスなど周囲の勧誘がないと始めにくい性質を持つためであろう。故にこの種目群は周囲の勧誘が参加の誘因となりやすい種目であると思われる。

挑戦・達成因子は標準的球技志向とファッション性志向と相関が認められた。標準的球技志向の種目はバスケットボール、バレーボールなど比較的試合の機会が多い種目を含んでおり試合経験の希望と関連しているのではないだろうか。またファッション性志向との相関は自分への挑戦が目新しい種目を行うことと合致して認識されている結果と考察される。

#### 4. まとめ

本稿では前報に引き続き、女子大学生におけるスポーツ参加について検討した。今回は前回得られた規定要因を吟味し、スポーツ参加への影響が大きいと考えられる5つの要因について

## 女子大学生におけるスポーツ参加の検討（Ⅱ）

クロス集計により各要因別に検討した。さらにスポーツ参加動機と志向性の各因子間の相関係数を求め、動機因子と志向性因子の相関から女子大学生のスポーツ参加に対する態度・意識について考察した。

前報では一般的傾向として「仲間作りを動機としたスポーツ活動欲求を持ち、スポーツ種目のファッション性に関心があるが、実際に行うにあたっては通学時間等の時間的条件やお金がかかることが阻害要因になっている」という結果が得られた。今回はさらに以下のような結論が得られた。

- 1) スポーツ活動に対する欲求が強いほど在籍大学または他大学のスポーツサークルに加入している傾向が認められた。
- 2) 通学時間の長さはスポーツ活動の阻害要因にはなっているが、スポーツサークルの加入状況には影響していない。
- 3) 半数以上の者がアルバイトをしているが、その実施頻度とスポーツサークルの加入状況に関連性はみられない。
- 4) 高校在学中の部活動経験は大学でのスポーツサークルへの加入を促進する。また家族にスポーツ経験者がいることはスポーツ参加の誘因になる。
- 5) スポーツ参加の動機と志向性の関連では各因子に特徴的な相関がみられ、女子大学生のスポーツ参加において各種の動機に対応したスポーツ種目（志向性）が認識されている。

本研究ではスポーツ参加の現状をスポーツサークルの加入状況からみたが、女子大学生のスポーツ参加の問題は表面的な加入状況ではなくスポーツサークルの活動内容に多く内在していると考えられる。つまり活動日数、練習時間などの活動状況、各個人の出席状況また競技志向か所謂同好会のような親和志向なのかという活動の質に言及する必要がある。今後、幅広いスポーツ参加の形態を持つ一般大学生のスポーツ参加を検討するには上述した質的側面を把握し、参加者の動機や活動の満足度と関連づけた考察が重要であろう。

## 引用・参考文献

- 1 荒井貞光・松田泰定「スポーツ行動に関する実証的研究(2)」体育学研究, 22-3:154-68, 1977.
- 2 原田崇彦・菊池秀男「スポーツ参加者のライフスタイルに関する研究」体育学研究, 35-3:241-53, 1990.
- 3 東川安雄・荒井貞光他「スポーツ行動に関する実証的研究(4)」体育・スポーツ社会学研究, 2:25-44, 1983.
- 4 伊藤豊彦・織奥信男「体育学習における児童生徒の楽しさを規定する要因と教師の認識」体育学研究, 33-2:123-33, 1988.

高見和至・山川岩之助

- 5 金崎・多々羅他「スポーツ行動の予測因に関する研究(1)」健康の科学, 3, 45-57, 1981.
- 6 三宅紀子「ボディーイメージとスポーツニーズ」スポーツ心理学研究, 17-1: 34-40, 1990.
- 7 Murray. E. D. (八木 訳); 動機と情緒, 岩波書店. 1966.
- 8 永吉・江橋他「フィジカルレクリエーション成立を促す要因分析—林の数量化理論を用いて—」レクリエーション研究, 6; 21-35, 1979.
- 9 丹羽劭昭・村松洋子「女子大学生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究」体育学研究, 24-1: 25-38, 1979.
- 10 丹羽劭昭・長沢邦子「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」体育学研究, 25-2; 109-19, 1978.
- 11 斎藤隆志・伊藤信之他「筑波大学生のスポーツ活動選好類似性によるスポーツの分類」大学体育研究 13: 57-84, 1990.
- 12 高見和至・山川岩之助「女子大学生におけるスポーツ参加の検討 (I)」川村学園女子大学研究紀要, 3-2, 155-179, 1992.
- 13 多々羅・厨「スポーツ参加の多変量解析(1)」健康の科学, 2: 17-25, 1980.
- 14 徳永幹雄・庭木守彦他, 現代スポーツの社会心理, 遊戯社, 1985. pp. 50-78.
- 15 山口・糸野他「パス解析によるスポーツ参与の分析」筑波大学体育科学系紀要, 2: 68-85, 1979.